心の発達の支援に関する研究（中間報告）

本研究は，Ⅰ期（平成12年度～14年度），Ⅱ期（平成15年度～16年度）に続く研究である。これまでの研究で，行事を核とした，グループ・アプローチの計画的，継続的実践を通して共感的人間関係が形成され（心の居場所づくり），行事に協力して取り組む過程において児童生徒は自己有用感を得ることができた（絆（きずな）づくり）。本研究では，人間関係づくり後の取組として，心の発達を支援する「積極的生徒指導」の可能性を探った。社会性の育成，学業指導，キャリア教育の実践を中間報告する。

＜検索キーワード＞　グループ・アプローチ　構成的グループ・エンカウンター　積極的生徒指導
キャリア教育　社会性　学業指導　予防開発　教育相談

研究会委員

扶桑町立扶桑東小学校教諭	千田みどり
豊田市立御蔵小学校教諭	小川　洋一
安城市立桜町小学校教諭	柴田　辰之
春日井市立柏原中学校養護教諭	辻本　祐子
蒲郡市立形原中学校教諭	松本　康利
蒲郡市立大塚中学校教諭	宇野　晶由
県立東郷高等学校教諭	柴田　智宏
県立小坂井高等学校教諭	太田　恭子
県立岡崎工業高等学校教諭	岡久　雅浩
総合教育センター教育相談研究室長	村上　慎一
総合教育センター研究指導主事	遠山久美子
総合教育センター研究指導主事	村越　英昭
総合教育センター研究指導主事	正木　克典
総合教育センター研究指導主事	浜島利枝子（主務者）

はじめに

不登校児童生徒数は平成13年度をピークにして，平成14年度に減少に転じたものの依然として多い。また，学校関係者や，教育行政にかかわる者の様々な努力にもかかわらず，暴力行為，学級崩壊といった学校が抱える課題もまた深刻である。少子化・核家族化や，地域の教育力の低下，子供の遊びの変化といった社会環境の変化によって，児童生徒が学齢期前に身に付けるべき社会性を身に付けないままに小学校に入学していることがこれら課題の背景としてあるという指摘もある。

当センターではこれら不適応行動を「予防」し，児童生徒が自らの手で自らの未来を「開発」する力を育成し,「生きる力」をはぐくむ方法の一つとして構成的グループ・エンカウンター（ＳＧＥ, P. 109参照）に着目して平成12年度から研究を始めた。本研究は第Ⅰ期「予防・開発的教育相談の在り方に関する研究―構成的グループ・エンカウンターを中心にして―」（平成12年度～14年度），第Ⅱ期「予防・開発的教育相談の推進に関する研究―行事をいかすグループ・アプローチを中心として―」（平成15年度～16年度）に続く第Ⅲ期の研究であり，本年，平成17年４月に立ち上げたものである。

今回の中間報告は，これまでの研究成果を踏まえて今後の研究の方向性を提案する。まず，平成 16 年度までの研究報告で明らかになったことを概観することとする。

第Ⅰ期（平成 12 年度～14 年度）

第Ⅰ期「予防・開発的教育相談の在り方に関する研究―構成的グループ・エンカウンターを中心にして―」（平成 12 年度～14 年度）と題する研究では，学級活動，部活動，保護者会，教科の授業等，様々な場面で実践したところ，予防・開発的教育相談活動を実践することで，集団内の結びつきが強くなり，帰属意識が高まるなど効果があることが確認できた。同時に，教育活動に定着させるために以下の課題が明らかになった。

① 週５日制の完全実施と，カリキュラム上の位置付けがないため，実践時間の確保が難しく，工夫する必要がある。

② 単発的な取組ではなく，年間計画に基づいた取組にしていく必要がある。

③ 構成的グループ・エンカウンター（ＳＧＥ）以外のグループ・アプローチとの関連について研究する必要がある。

第Ⅱ期（平成 15 年度～16 年度）

第Ⅰ期の研究成果を踏まえて，続く第Ⅱ期（平成 15 年度～16 年度）においては，実践時間の確保と年間計画に基づいた実践を目指して,「予防開発的教育相談の推進に関する研究―行事をいかすグループ・アプローチを中心として―」を進めた。

実践時間の確保のために，朝の会，帰りの会を活用したり，活動的な授業の後に振り返りの時間を設けたりするなどの工夫を行った。年間計画については，実施しやすさを考えて，行事を核とした計画を立てた。４月の学級開き，年間を通しての学校行事前後の活動，３月の学級を閉じる活動が中心となる。

① ４月の環境移行時にガイダンスの一環として，学級集団づくりの活動をする。その後，朝の会，帰りの会などを利用してショート・エクササイズを実施し，「心の居場所づくり」をする。

② 行事の前には，児童生徒が，行事の有する教育的意義を十分に理解した上で，自発的に参加し，協力するようにするために，事前に「行事を盛り上げてくれる人はどんな人か」とか，「縁の下の力持ちとして協力する人はどんな人か」といった質問を投げかけ，話し合わせる。その後，それを教室に掲示しておく。これにより協力し頑張ることの具体的目標が明らかになり，自己の役割を果たそうとする意欲につながる。こうして，主体的に取り組んだ行事であれば，満足感や成就感，自己効力感を味わうことができる。また，行事の後で仲間の頑張りを褒めるときの規準ともなる。仲間からのフィードバックはなによりも児童生徒の自己有用感を育て，「心の絆づくり」の意味をもつことになる。

第Ⅱ期の研究の結果，行事を核とした年間計画を立てて継続的に取り組むと効果が大きいことが明らかになった。「楽しい学校生活を送るためのアンケートＱ－Ｕ」（P. 114～P. 115　参照）では学級生活満足群に属する児童生徒が大幅に増加した。児童生徒がクラスを居心地がよいと感じ，みんなに存在を認められているという実感がえられ，マズローのいう所属欲求や，承認欲求（P. 115～P. 116　参照）が満たされたとき，児童生徒は自ら課題を発見し，課題を解決するために自主的かつ主体的に取り組むことが確認できた。学級活動での取組を通しての「心の居場所づくり」，行事を通しての「心の絆づくり」の取組が児童生徒を育てることに効果がある方法として位置付けることができた。

３点目の課題への対応として，ＳＧＥ以外のグループ・アプローチにも実践を広げ，報告した。また,「学校教育に取り入れられている主なグループ・アプローチ一覧表」（P. 117～P. 118　参照）にま

とめた。

今年度立ち上げた「心の発達の支援に関する研究」はこれまでに述べた今までの研究成果を基盤にし，更に発展させるものである。

１　研究の目的

平成 12 年度に本研究の基礎となる「予防・開発的教育相談の在り方に関する研究」を立ち上げて以来５年を経て，不登校のほかにも，現代の教育的課題として児童生徒の社会的規範の低下が指摘されるようになった。また，長引く不況や企業の海外移転などの影響から失業率が増加し，若年者に及ぶとともに，若年者の就業意欲の低下がニートの問題として社会的に注目されるようになった。このような時代的状況と実践研究の成果を踏まえ，「心の居場所づくり」と行事を通して「絆づくり」をしたあと何ができるか，それぞれの学校の状況，児童生徒の状況に合わせ，発達の援助をする方法を探ることとした。

「心の居場所づくり」と「絆づくり」は道徳の内容項目を分類整理した四つの視点で言えば，「１　主として自分自身に関すること」「２　主として他の人とのかかわりに関すること」に該当する活動である。さらに，現代的課題として「３　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」「４　主として集団や社会とのかかわりに関すること」への対応が要請されている。そこで，ねらいを人間関係づくりや温かな学級づくりだけではなく，社会性の発達や，進路意識の育成（キャリア教育）にもひろげ，ＳＧＥをはじめとするグループ・アプローチ（個人の成長，教育，対人関係の改善，組織開発などを目的として，集団の機能，過程，力動を用いる各種アプローチの総称）を活用し，児童生徒の生きる力をはぐくみ，心の発達を援助することを「積極的生徒指導」と位置付け，学校教育活動における展開の可能性を探ることとした。

２　研究の方法

研究委嘱委員が各学校や児童生徒の状況に応じて，「総合的な学習の時間」及び小中学校は３領域（教科，道徳，特別活動），高校は２領域（教科，特別活動）で，学級の課題，学級を構成する児童生徒がもつ課題に対応した活動をプログラム化し，実践的に研究を行った。

３　研究の内容

今年度は研究を立ち上げ１年目であり，児童生徒の十分な変容を報告できる状態には至っていないが，16 年度までの研究成果を生かし，今後の研究の方向性を提示することとした。

実践１　【小学校】友達と認め合い，自分を表現する児童の育成
　　―複式学級での実践を通して―

実践２　【中学校】自分の思いや願いを素直に表現できる生徒の育成
　　―自分も相手も大切にできるアサーション・トレーニングの実践を通して―

実践３　【高等学校】進路意識を高め，学校生活に前向きに取り組む生徒の育成
　　―学業指導カウンセリングとキャリア教育の実践を通して―

実践４　【高等学校】高等学校における非行の予防教育
　　―三つのグループ・アプローチの実践を通して―

【実践１】の小学校では，小規模校ゆえの問題に取り組んだ。幼いときからの固定化したイメージに変化を促し，新しい人間関係をはぐくもうとする実践である。力関係が決まってしまっている中で

は，新しい関係を構築することは難しく，リーダーは固定化し，少々嫌だと思っても互いに自分の考えを主張することなく，日々を過ごしている傾向がある。そこで，友達のよさを認め合うエクササイズとともに，話すスキル・聞くスキルを高めるエクササイズに取り組んだ。友達のよさを認め合った上で友達の意見を聞き，自分の考えを言えるアサーション(自分にも相手にも気持ちのいい自己主張)のスキルを身に付けることによって新しい関係を構築する可能性を探った。

友達と認め合う活動の中で，保護者の視点から今までの自分の成長と友達の成長を見つめる活動を行った。自分ひとりの「いのち」の誕生と成長に多くの人々の思いと願いがどれほど重なってきたかに思いをはせる活動となった。自分と同じように友達の「いのち」にもまた，多くの人の思いが重なっているかけがえのない存在であることを実感したとき,この活動は「いのちの教育」(道徳の内容　３主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること）という意味をもつに至った。

【実践２】の中学校の実践も小規模校での活動であり，同じような課題をかかえる。１小学校，１中学校という学校環境の中で人間関係をいかに再構築していくかが課題である。少子化が進む中で，幼少時の人間関係を中学校にまで持ち越している集団を対象とするというのは決して珍しいことではない。それと同時に中学生という発達段階にある生徒を対象に，どのような活動が適切かを課題として取り組んだ。テーマとしては【実践１】にもあるアサーションを含むが，中学生という発達段階にある生徒たちが，仲間からのプレッシャーにどう対応するかを考える内容となっていて，小学校とは異なる内容となっている。青年期前期という発達段階に応じた取組を示した。

【実践３】と【実践４】は高等学校の実践である。高校に導入されやすいのではないかと考え,【実践３】は，学業指導，進路指導をテーマとし,【実践４】は，生徒指導をテーマとした。進路指導や，生徒指導をしながら，人間関係づくりをしていく方法が，高校段階では望まれるのではないかと考えたということである。高校生ともなると，生徒自身も正面きって人間関係づくりをテーマにした取組では照れてしまい，うまくいかない傾向がある。青年期中期という発達段階に合ったテーマと内容を設定するこのような取組は今後の研究の在りかたを示しているといえよう。

４　研究のまとめと今後の課題

16 年度までの「心の居場所づくり」「心の絆づくり」を中心とした実践研究から，17 年度は発達段階に応じて,「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」（いのちの教育),「主として集団や社会とのかかわりに関すること」（アサーション・トレーニング)，生徒指導，学業指導，進路指導（キャリア教育）などにも実践研究を広げ，現場で取り入れやすい形で示した。

子供をめぐる犯罪が後を絶たない。人間関係形成能力の未熟さが関係する事件も少なくない。学校教育の中で人とかかわることのすばらしさを実感し，好ましい人間関係を形成する能力を育成するための,子供の発達段階に即したこのような取組はますます重要になってきている。それだけではなく，他者への不信よりも信頼の方向にバランスをおいた健全な社会性の発達や，人生の方向や目的を有意義なものしていこうと志向する子供を育成するためのプログラムを今後作成し実践していきたい。その時に，振り返りの重要性に着目していきたいと考えている。また，今回の中間発表では，その方向性を示したが，実践期間が短く，検証が十分ではない。実践の検証は今後の課題としたい。

実践時間の確保は依然として課題として残っているが，教科の授業での取組など，研究会委員の尽力で様々な提案ができたように思う。16 年度の取組も，本発表も，担任としての取組が多い理由は，担任として実践する方が実践時間をとりやすいことにあるが，今後，担任以外の立場からの実践を報告したいと考えている。

おわりに

少子高齢社会が到来し核家族化が進む中で，集団の中での体験を通して獲得する人間関係にかかわる力や，社会性の育成に学校の果たす役割は，ますます重要になってきている。今後実践を継続して研究を更に深めたい。

＊以下の参考文献は「グループ・アプローチＱ＆Ａ」（Ｐ.109-116）「学校教育に取り入れられている主なグループ・アプローチ」（Ｐ.117-118）にも共通する

＜参考文献＞

文部省『生徒指導資料 11 集　教育課程と生徒指導　高等学校編』(昭和 57 年　大蔵省印刷局)

文部省『生徒指導資料 20 集　生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導　中学校･高等学校編』(大蔵省印刷局昭和 63 年)

文部省『生徒指導資料 21 集　学校における教育相談の考え方･進め方 中学校・高等学校編』(大蔵省印刷局平成 2 年)

文部省『中学校学習指導要領解説　道徳編』(大蔵省印刷局　平成 11 年)

河村茂雄『楽しい学校生活を送るためのアンケート実施･解釈ハンドブック　中学・高校用』(図書文化社平成 15 年)

河村茂雄編『Ｑ－Ｕ学級満足度尺度による学級経営コンサルテーション･ガイド』(図書文化社　2001)

河村茂雄他編『Ｑ－Ｕによる学級経営スーパーバイズ･ガイド　高等学校編』(図書文化社　2004)

國分康孝・國分久子編『構成的グループ・エンカウンター事典』(図書文化社　2004)

三國牧子「英国のパーソン・センタード・オリエンテーションに基づくカウンセラー養成 ―受講体験に基づいて―」日本人間性心理学会第 21 回大会配付資料

愛知県総合教育センター「予防・開発的教育相談の推進に関する研究―行事をいかすグループ・アプローチを中心として―」(平成 16 年度愛知県総合教育センター研究紀要第 94 集):http://www.apec.aichi-c.ed.jp/toku/yobo/top.htm

＜その他の参考資料＞

ＪＫＹＢ研究会：http://www5c.biglobe.ne.jp/~jkyb/index.html

青少年育成フォーラム（ＪＩＹＤ）：http://www.jiyd.org/lifeskills/lifeskills_summary.html

教育カウンセリングステップアップ情報 http://www5b.biglobe.ne.jp/~spring01/Step%20up/Step%20up%20Top.html

学校グループ・ワーク・トレーニング：http://www.eva.hi-ho.ne.jp/kumasan/kumasan1.html

つんつんの体験から学ぼう（日本体験学習研究会など）：http://www.nanzan-u.ac.jp/~tsumura/